

長彦と丸彦

豊島与志雄

青空文庫

むかし、近江おうみの国、琵琶湖びわこの西のほとりの堅田かただに、ものもちの家がありました。そこに、ふたりの兄弟がいました。兄はたいへん顔が長いので、堅田の顔かおなが長の長彦ながひこといわれていましたし、弟はたいへん顔が丸いので、堅田の顔かおまる丸の丸彦まるひこといわれていました。

顔長の長彦は、体がやせて細く、少しも力がありませんでしたが、たいそう知恵がありました。そして、京の都からやって来て、そこに隠れ住んでいる、年とつたえらい先生について、いろいろ

なことを学んでいました。

顔丸の丸彦は、知恵はあまりありませんでしたが、体がまるまるとふとつて、たいそう力があり、むじやきな乱暴者らんぼうで、野原や山を駆け廻ったり、剣や弓のけいこをしたりしていました。

このふたりの兄弟は、いたって仲がよく、互いに敬うやまいあつていました。

ある年の夏、ひどいひでりがして、琵琶湖の水が一メートル半程もへりました。そのひでりのため、米や芋いもがほとんどれませんでしたから、そのあたりの人々は、たいへん困りました。食ものにもだんだん不自由するようになりました。

かただ堅田の顔長の長彦は、一日一晚、考えつづけました。そしてそ

のあたりのおもだった人たちに相談しました。

「米や芋いもは、一年に一度きりできません。このままでは、貧しい人達は、ほんとに食べものがなくなるでしょう。聞くところでは、この湖水こすいのずっと北の方、海に近いあたりは、米や芋がたくさんできたそうです。だから、みんなで金を出しあつて、買って来ようではありませんか」

それはよい考えだと、みんな賛成しました。そしてお金を出しあつたので、たくさん集まりました。

ところが、遠い北の国まで、米や芋を買いに行くのは、たやすいことではありません。まだぶつそうな世の中で、途中でどんな悪者にあうかわかりません。これはぜひとも、力のつよい顔丸の

丸彦に、行ってもらおうということになりました。

そこで、顔丸の丸彦は、湖水の岸に多くの船をしたて、おおぜいの水夫たちをひきつれ、刀をさし、鉄づくりの鞭むちをにぎりしめた、いさましい姿で、まっ先の船にのりこみ、追い風をまつて出発しました。

この一隊は、琵琶湖びわこをつききり、竹生島ちくぶじまからずつと先の方の岸に船をつけ、それから北の国へ行つて、米や芋をたくさん買いいれ、人夫をやとつて、それを船にいっぱい積みこみました。悪者にもであわず、なにもかもうまくいきましたので、みんなは喜びいさんで、帰りをいそぎました。

すると、思いがけなく、湖水の上で暴風雨あらしにであいました。見

る間に空はまっ黒な雲におおわれ、大粒の雨が降りだし、はげしい風が吹いてきて、湖水には大波が立ちました。顔丸の丸彦は水夫たちをさしずして、多くの船がはなればなれにならぬよう、ふとい綱でつなぎあわせ、岸の方へ進ませようとしたが、あたりは夜のように暗く、ただ風と波にながされるばかりでした。そのうちに、岩ばかりの岬みさきに吹きつけられ、船は二つにわれたり、ひっくりかえったりして、沈んでしまいました。みんなは船をすてて、岬に泳ぎつきましたが、けがした者も多くありました。

顔丸の丸彦は、さすがに、刀と鉄の鞭むちとを手からはなさず、水夫たちをよび集め、がたがたふるえてるのを励はげましました。そして道をたずねあて、湖水こすいのふちにそって、夜も昼も歩きとおして、

家へ帰りつきました。

そして丸彦は、兄に今までの出来事をくわしく話してから、いきました。

「申しわけのために、私は死んでおわびをします、あとのことは、よろしくお願いします」

顔長の長彦は、だまつて聞いていましたが、しずかに答えました。

「生きるも死ぬるも、まあ私にまかせておきなさい。そしてまず、水夫たちにてあてをしてやって、待たせておきなさい」

それから顔長の長彦は、二日二晩考えつづけました。そして弟にいいました。

「こんどのことは、もうどうにもしかたがない。けれど、私たちには責任があるし、死んだからとて、その責任をはたせるわけのものではない。このうえは私たちだけで、できるだけのことをしてみよう。元氣を出しなさい」

そこで、長彦と丸彦はいろいろ相談して、失敗のとりかえしをするおおつことになりました。

まず大津の町までいって、できるだけたくさんお金を借りあつめ、あちこちで船をやといました。それから水夫たちをあつめ、丸彦が隊長となつて、また北の国へ、米や芋いもを買いにいきました。そしてこんどは丸彦も、用心に用心をかさねましたので、ぶじに荷物を運んで来ました。

そうした旅を三度くりかえしました。そして米や芋いもが、山のよ
うにたくさん集まりました。

それを見て、心配していた人たちは、ようやく安心して、喜び
あいました。

二

みんなが喜んでるうちに、ひとり、堅田かただの顔長の長彦は、だん
だん考えこんできました。しだいにお金に困ってきたのです。

大津の町で借りあつめたお金は、はじめ相談した人たちが出し
あつたお金よりも多かつたほどですが、湖水こすいに沈んだいくつもの

船の持ち主に、その船の代をはらったり、それから三度も、米や芋の買い入れのために、たいへんなお金を使ったので、すぐに足りなくなりました。おもだった人たちのうちには、きのどくがつて、お金をいくらかでも出そうという者もありましたが、多くは、はじめの失敗にこりて、だまっています。

そこで、顔長の長彦は、三日三晩、考えつづけて、弟にいいました。

「たくさんの貧しい人たちのためになることだから、私は決心をしました。大津の町のお金持で、この屋敷やしきを売ってくれるなら、お金はいくらでも出そうという人がある。それも、こちらでお金が出てきたら、いつでもまた買ひもどしてよいという約束だ。だから、

一時、この屋敷をお金にかえたいと思うが、どうだろうか」

顔丸の丸彦は、野原や山をとびまわることがすきで、家や屋敷やしきなどはなんとも思っていないませんでしたから、すぐに答えました。

「そうです。お金にかえておしまいなさい。またあとで、買いもどせばよろしいでしょう」

それで、すぐに話はきまりましたが、ただ一つ、困ったことがありました。

その屋敷の庭のかたすみに、大きな梅うめの木が一本ありました。

その梅の木について、ふたりのお母さんが、亡くなる時、ふたりを枕まくらもとに呼んで、くれぐれもいい残したことがありました。

「あの梅の木は、とてもたいせつな木です。それですから、もし

もよそへひき移るようなことがありましたら、あの木だけはかならず、ほかの人にたのまず、あなたたちふたりで、よく掘りおこして、枯れないようにして、持って行かなければいけません。これは、なくなつたお父さんと私とふたりで、あなたたちに、くれぐれもいい残すことですから、忘れないようになさい」

その梅の木が、ちようどいま、花を咲かせておりました。それを掘りおこして、あらたな小さい家の庭へもつていくのは、なんだかわいそうでたまりませんでした。しかし、両親からいい残されたことですから、守らねばなりませんでした。

「だいじょうぶです。私が掘りおこしてみましよう」

顔丸の丸彦は、すぐに庭へおりていって、その強い力で、梅の

木の根のまわりを、深く掘りはじめました。

梅の花がはらはらとちりました。顔長の長彦は、その花をじつと眺めていました。

がちりと、何か鍬くわの先にあたったものがありました。それからまた、がちりがちりと、鍬は少しもおりません。丸彦はそのへんを掘りひろげました。よく見ると、そこには大きな石のふたがありました。やつとのもので、その石のふたをとりのけますと、下は石の箱になっていまして、その中にまた、大きな木の箱がありました。箱のふたをあけると、丸彦はびっくりして声をたてました。長彦も息をのみました。

大きな箱の中には、金銀や宝ものがいっぱいあったので

す。

梅うめの木のわけが、ようやくふたりにもわかりました。両親は家のためを思つて、万一の時の用意に、そこにたくさん財産を埋めておいてくれたのです。

それで、ふたりは助かりました。屋敷やしきも売らないですみました。借りたお金もはらうことができました。兄弟のせわになつた人たちも、みな助かりました。米や芋いもがたくさんとどいていますし、それを、貧しい人たちは、ただでわけてもらふようになりました。そして、ひでりのあとの翌年まで、皆は食物に不自由なくすごせました。

こうして、堅田かただの顔長の長彦と顔丸の丸彦とは、みんなから神

さまのようにあがめられました。人々はいろいろ相談して、顔長の長彦には、支那しなからきたというみごとな紫檀したんの机を、顔丸の丸彦には、琉球りゅうきゅうからきたという大きな法螺ほらの貝を、記念の贈りものにしました。どちらも、そのころでは珍しい品物でした。

顔丸の丸彦は、法螺の貝をたいへんうれしがって、野原や山を吹きならして歩きました。顔長の長彦は、紫檀の机に寄りかかって、庭の梅の木を見ながら、なにかしきりに考えていました。

三

堅田の顔長の長彦が、庭の梅の木をながめながら考えましたの

は、亡くなった両親のありがたい心のことでした。両親があとあとのことにまで気をつけて、梅の木の根もとにたくさんの財産を残しておいてくれましたので、じぶんたちも助かり、近所の人たちも助かったのです。

そのありがたい心を、なんとか記念にしておきたいものと、顔長の長彦は、四日四晩、あれこれと考えました。そして、よいことを考えつきました。

京の都の、名高い彫り物師ほにたのんで、観音様かんのんさまの像をほつてもらいました。それができあがってきますと、庭の梅の木のそばに、小さいお堂をこしらえて、そこに観音様の像をまつりました。そのようにして、両親のありがたい心の記念としたのです。

そのことが、すぐにあちこちへ知れわたりました。ありがたい心がこもっている観音様というので、お詣りまゐに来る人がありました。近くの人たちばかりでなく、遠くの人たちまで、聞きつたえてやって来ました。

するうちに、ふしぎなことがおこりました。ある夜、その観音様がなくなつてしまつたのです。

だれか、悪者が、盗んでいったのでしようか。

顔長の長彦と顔丸の丸彦は、方々さがしまわり、たずねまわりましたが、観音様の行方ゆくえは、さっぱりわかりませんでした。

ところが、またふしぎなことには、その観音様かんのんさまが、七日たつと、もとのとおり、お堂の中にもどつていました。

それとともに、ふしぎなうわさが、ぱつとひろまってきました。

——かただ

堅田の観音様は、七日のあいだに、あちこち歩いてこられた

そうだ。京の清きよみず水の観音様や、

やまと

はせ

大和の長谷の観音様など、なか

まの名高い仏様にも会ってこられたそうだし、そのほか、あちこち、まわってこられたそうだ。その証拠には、足に、まだ泥がいつぱいついてる。あれはありがたい観音様だ。生きた観音様だ。そういううわさといっしょに、おおぜいの人たちが、お詣りまいにおしかけて来ました。

顔長の長彦と顔丸の丸彦は、お詣りに来た人たちから、そのうわさをきいて、びっくりしました。そしてともかくも、観音様の足をしらべてみますと、足のうらには、泥がいつぱいついていま

した。

その足の泥を、じっさいに見た人もたくさんありますので、うわさは確かなこととなつて、ますますひろまるばかりでした。そしてお詣りに来る人も、ますます多くなりました。

顔長の長彦は、腕をくんで考えこみました。木でできている観音様の像が、七日のあいだ、あちこちまわり歩かれたということ、は、どうもほんとうとは思われませんでした。これはきつと、悪者どもが、なにかたくらんで、観音様を七日のあいだ盗み出し、足に泥をぬつてもとにもどし、そしてふしぎなうわさをいいふらしたにちがひありません。

「用心しなければいけないよ」と長彦はいいました。

「悪者がいるとすれば、私がひとつとらえてみせます」と丸彦は答えました。

けれども、その悪者はなかなかわかりませんでしたし、お詣りに来る人はふえるばかりでした。

ありがたい観音様だ、かんのんさま生きた観音様だ、といってお詣りに来る人たちは、それぞれおさいせんをあげていきました。いくらことわっても、なげ出していきました。

そのおさいせんが、だんだんたまってきた。大きな木の箱にいつぱいになりました。それは、観音様の前にそなえておいて、また新たにおさいせん箱をこしらえねばなりませんでした。

するうちに、またふしぎなうわさがつたわってきました。――

堅田^{かただ}の観音様は、こんどまた、旅にいかれるそうだ。そしてこんどは、少し長い旅らしいから、おるすにならない前に、早くお詣りをしておくがよからう。

そのうわさといっしよに、また、近くや遠くからお詣りに来る人がふえました。

「いよいよ用心しなければいけないよ」と、長彦はいいました。

「ええ、充分に気をつけます」と、丸彦は答えました。

四

さて、堅田の顔丸の丸彦は、腰^{こし}に刀をさし、片手に、鉄づくり

の鞭むちをたずさえ、片手には、たのしい法螺ほらの貝をもつて、毎日、出あるきました。そして、怪あやしい者でもうろついてはいないかと、しらべてあるきました。

しかし、悪者の手がかりさえ得られませんでしたし、第一、観音様についてのふしぎなうわさも、どこから出たものやらさつぱりわかりませんでした。

ところが、ある日のことです。山奥の方をしらべあるいて、そして夕方になってから帰りますと、山の裾すそのさびしい野原に、馬をつれた男が、ひとりで酒をのんでいました。

その男は、背中にけもの毛皮をつけ、足にわらじをはき、腰こしに大きな山さん刀とうをさして、獵りようし師しのようにも見えましたが、なん

だか、ひと癪^{くせ}ありげなようすでした。

それが、草の上にあぐらをかいて、徳利^{とくり}と茶碗を前において、酒をのんでいなのです。

なお怪^{あや}しいのは、そのわきに、馬が一頭、木につないでありました。そのへんに見なれない大きな馬で、栗色の毛なみはつやつやとして、額^{ひたい}のまん中に白いところがあり、四つ足とも、ひずめの上の方だけが白毛で、じつに珍らしいりっぱな馬です。

顔丸の丸彦は、その男のそばに立ちどまって、じつと男を見つめました。もしやこの男が、へんなうわさをいいふらしてあるく悪者ではないかと、そんな気がしてなりませんでした。

男はじろりと丸彦を見あげましたが、だまって酒をのみました。

丸彦はそこにかがんで、だまつたまま、男の茶碗をとって、徳利から酒をついで、ぐつと一口にのみほしました。そして男をじつと見ました。

こんどは男が、茶碗に酒をついで、一口にのみほして、そしてじろりと丸彦を見ました。

丸彦はまた、茶碗をとって、酒をついで、一口にのみほして、そして男をじつと見ました。

男もまた、茶碗に酒をついで、一口にのみほして、丸彦をじろりと見ました。

ふたりとも、ひとことも口をききませんでした。

やがて、丸彦は立ちあがって、馬のそばにいき、そのみごとな

姿をじろじろながめました。

男はあぐらをかいたまま、だまって丸彦の方を見ていました。

その時、丸彦はとつぜん、右手の大きな法螺ほらの貝を、馬の耳もとにくつつけて、息いっぱいに、ぶうぶうと吹きならしました。

馬はおどろいてとびあがり、男はおこつて、山刀さんとうをぬいてとびかかつてきました。

丸彦は一足よけて、鉄づくりの鞭むちを左手にふりかざし、男のほうをあしらいながら、右手の法螺の貝をなお吹きならしました。馬はますますおどろき、たけりくるつて、綱をひききつたはずみに、いっさんにかけて出しました。それを見ると、男はびつくりして、丸彦の方をすてて、馬のあとを追って走りだしました。

丸彦は、はははと笑いました。けれどやがて、笑いやめて、法螺の貝で額をこつんと叩きました。

「しまった。あの男は怪しい奴だ。あれをつかまえるのだった」
しかしもう、馬も男も、どこかへいつてしまつて、姿は見えませんでした。

丸彦は、そそっかしいことをしたとくやみながら、家の方へかえつていきました。

野原をよこぎり、小さな丘をこえて、川づたいに帰つていきますと、その川の岸の柳のこかげに、なにか大きなものがつつ立っていました。もう、うす暗くなつていましたが、よく見ると、それが、さっきの馬だったのです。道に迷つて、川岸にぼんやり立

ちどまっているのです。

男の姿はどこにも見えませんでした。

「せめて、馬でもつかまえてやろう」

丸彦はそういって、しずかに歩みよって、まんまと馬をつかまえました。

つかまえてみると、なおさらりっぱな馬でした。これほどの馬は、どこをさがしても見つかりそうもありませんでした。

丸彦はすっかりうれしくなりました。その馬にのり、法螺ほらが貝をこわきにかかえて、家へ帰りました。

そして丸彦は、長彦にあつて、馬をいけどりにしてきたわけを話し、馬のじまんをしました。

長彦はいいました。

「なるほど、これはりっぱな馬だ。しかし、この馬をつかまえてきたことが、よいことになるか、悪いことになるか、いつそう用心しなければなるまい」

「私がひきうけます」と、丸彦はいいました。

丸彦はただ、馬のことがうれしくてたまりませんでした。そして、かんのんさま観音様のお堂のそばに、りっぱな馬ごやをつくりました。

五

それから、しばらくたちますと、なんとなく、怪あやしいことが目

につくようになりました。

観音様にお詣りまいにくる人たちの中にまじつて、目つきの鋭い、へんな男が、こつそりようすをうかがつてゐるようでもありました。夜なかに、観音様のお堂のあたりで、物の音がすることもありましたし、馬がにわかにも動きまわることもありました。庭のあちこちに怪しい足跡がついてゐることもありました。

そして、ある夜、おそく、馬ごやの中で、馬がひどくあばれだしたようで、それからまた静かになりましたが、かねて気をつけていた顔丸の丸彦は、そつとおきあがつて見まわりにいきました。

月が出ているはずでしたが、霧きりのふかい夜で、うす暗くぼうつとしていました。すかしてみると、馬ごやの前に、黒いみなりの

男が立っていて、馬ごやの中をのぞいていました。

丸彦はかけよるが早いか、男の頭を、鉄づくりの鞭むちでぴしりと打ちつけ、男がちよつとよろめいて立ちなおるところを、こんどは、そのわき腹を足でけりあげました。男は気絶してぼったり倒れました。

けれど、丸彦はもうその男にかまっておれませんでした。そのすぐむこうに観音かんのんさま様のお堂の前に、もひとり、大きな男がつつ立っているのです。

やはり黒いみなりで、ひげをぼうぼうとはやした大男でした。恐れるようすもなく、丸彦の方をじつとにらみつけていました。

丸彦も大男をじつとにらみつけました。

大男は一足すすんで言いました。

「おまえは堅田かただの顔丸の丸彦か」

「そうだ。おまえはなにものだ」と、丸彦はいいました。

「おれは、鞍馬くらまの夜叉王やしやおうだ」

そして、ふたりはしばらくにらみあっていましたが、夜叉王は、地面に倒れている男をさしていいました。

「その男をもらっていくから、こちらにわたせ」

「わたさないぞ。ほしかつたら、腕むちづくでとってみろ」

そういつて、丸彦は鞭むちを捨て、両手を広げてつつ立ちました。

夜叉王やしやおうも、腰こしの大きな刀をそこにおき、両手をひろげてつつ立ちました。

二人は、やっと組みついて、互いにあいてをねじ伏せようとなりました。

丸彦はおどろきました。夜叉王の強いことといったら、まるで地面からはえぬいた岩のようで、押ししても引いても手ごたえがありません。うんうんもみあっているうちに、丸彦は下におさえつけられました。

ところが、夜叉王はそれから丸彦ののどをしめつけようとしたので、丸彦はそのすきをねらって、はねかえし、夜叉王の足をすくって、うまく夜叉王をおさえつけました。

丸彦はけんめいに夜叉王を押しえつけながら、頬をふくらまして、息のかぎり、法螺ほらの貝の音のまねを口で吹きならしました。

先ほどからの騒ぎと、今また、法螺の貝のまねの音を、聞きつけて、下男たちが出て来ました。

顔長の長彦も出て来ました。そしてとうとう、おおぜいで、夜叉王をしぼりあげてしまいました。

気を失って倒れている男も、息をふきかえさしてしぼりあげました。この男こそ、先日、野原で馬をつれて酒をのんでいたやつでした。

さて、こうなってみると、夜叉王も、さすがに覚悟がよく、すらすらと白状しました。——鞍馬くらまの夜叉王は、鞍馬山くらまのおくにいる賊ぞくのかしらでした。堅田かただの観音様かんのんさまの像のことをきいて、悪いことをたくらみました。それは、観音様を盗み出し、足に泥をぬ

つてもとにもどし、そして手下共にいいつけて、いろいろなことをいいふらし、たくさんおさいせんが集まったところを、盗んでしまおうと考えたのでした。

ところが、夜叉王やしやおうは、ゆつくりしておられないことになりま

した。京の都の大臣の所から盗んできた馬を、顔丸の丸彦にうばいとられてしまいましたし、その馬のことをよく知っている坂さかの上の朝臣あそんが、堅田かただにやって来られるそうでした。坂の上の朝臣は、もうすぐ来られるはずでしたから、どうあっても、その夜のうちに、馬を取り返し、おさいせんも盗んでしまうつもりで、だいたんにも手下とふたりきりで、忍びこんで来たのです。

「ひどいやつだ。うち殺してしましましょう」と顔丸の丸彦はい

いました。

「いや、まちなさい 私に考えがあるから……」と顔長の長彦はいいました。

そして、鞍馬くらまの夜叉王とその手下は、堅田の兄弟の所につなぎとめられました。

六

坂の上の朝臣は、はたして、堅田にやって来られました。堅田の顔長の長彦とは前からかんのんさまのしりあいでした。

朝臣は、堅田の観音様のふしぎなうわさをきかれて、顔長の

長彦を疑われたわけではありませんが、いろいろ怪しいことのある世の中でしたから、じつさいのようすを見とどけに来られたのでした。そしておどろかされたことには、京の大臣の所で悪者に盗まれたあのりっぱな馬が、とりおさえられていましたし、うわさのたかい鞍馬の夜叉王がつかまえられていました。

それについて、顔長の長彦の話を聞かれて、坂の上の朝臣が満足されたことは、申すまでもありません。そしてこれから先のことについても、ことごとく、長彦の考えに賛成されました。

あの観音様の像は、またどういうことで、悪者どものために、よくないことに使われるかわからないから、琵琶湖に捧げて沈めることにしよう、というのです。観音様のうちにも、魚籃観

音んというのがあつて、水に關係のふかいかたがあるし、また、

水すい天てんという水の中の神さまもあることだし、あの観音様に琵琶湖まもの護り主となつていただこう、というのです。

さて、その日になりますと、ありがたい観音様が、琵琶湖の護り主となつて、水にはいられるというので、おおぜいの人たちが湖水こすいのふちに集まりました。その岸には、紫色のはつぴをきた水夫たちが、洗いきよめた船を用意していました。その船の方へ観音様は進すすんでいかれました。

まつ先に、三井寺みいでらから迎えられたお坊さんが行き、次に、観音様をせおつている鞍馬くらまの夜叉王やしやおうがつづき、堅田かただの顔丸の丸彦がうしろから見はりをし、そのあとに、堅田の顔長の長彦と、坂の

上の朝臣がならび、さいごに、めしつかいの男や女がしたがいました。

人々はどよめきました。

お婆さんが、地べたにかがんで、観音様をふしおがみました。船頭のおやかたが膝ひざまずいて、観音様にそつと手をふれてお祈りをしました。それから、多くの人たちが、観音様をそつとなでて、それぞれになにか祈りました。

するうちに、観音さまをせおっている夜叉王が、しだいに苦しそうな息づかいをし、汗をながしました。観音様がだんだん重くなつていくようでした。

夜叉やしやおう主として、こんなにみんなから敬うやまいあがめられている

観かんのんさま音様を、わるだくみのたねに使ったことが、とてもくやまれ
てならないからでした。

そして船の近くまで来ると、夜叉王は心の苦しみにたまりかね
て、ばったり倒れました。その時、額ひたいをうって、傷をうけ、黒い
血がだらだら流れました。

夜叉王はまた起きあがりました。額からはもう、赤い血が出て
いました。そして、泣きながら顔長の長彦に頼みました。

「私も、観音様といっしょに、水にはいらせてください。観音様
のおともをして、いつまでも、この湖水こすいを護りまもらうございます」

それは、真心のこもった言葉でした。長彦はじつと夜叉王のよ
うすを見、深くうなずいていました。

「今日は、そういうわけにはいかないが、お前のことは、私が考えておいてあげよう。私にまかせておくがよい」

そうして、一同はめしつかいたちを残して、船にのりこみました。

船は沖へこぎだしました。沖の深い所までいくと、そこで、観音様はしずかに水へはいられました。

坂さかの上の朝臣あそんのはからいで、鞍馬くらまの夜叉王のことは、すっかり顔長の長彦にまかせられ、京の大臣の馬は、顔丸の丸彦がもらい受けました。

鞍馬の夜叉王は、もうまったく、よい心にたちかえっていまし

た。そして、丸彦にとらえられている手下の心も改めさせ、つづいて、鞍馬山のおくに残っていた手下どもも、心を改めさせました。

顔長の長彦は、夜叉王やしやおうがためていたお金を、貧しい人たちにくばってやりました。

それから、観音様かんのんさまに集まっているおさいせんをもとにし、じぶんもお金を出し、ほかからもお金をきふしてもらって、夜叉王のために大きな船をこしらえてやり、その船で、琵琶湖びわこじゆうをあちこち、客をはこんだり荷物をはこんだりさせました。

そのため、琵琶湖は大変便利になりました。そして、どんなあらし暴風雨の時にも、夜叉王の船はびくともしませんでしたし、また、

あの観音様が水にはいられた所には、波が少しも立たなかつたということがあります。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長彦と丸彦

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>